

第 11 回「日本語大賞」

テーマ「美しい日本語」

一般の部 優秀賞 受賞作品

「『お』の魔法」

東京都
小松崎 潤

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

僕は極度の話し下手である。そんな僕には苦しい出がある。それはコミュニケーションスキル研修を受けたときのこと。ここでは接客に必要な敬語を学んだ。講師の先生は言った。

「お」をつけるだけで印象は全く変わると。たとえば「お酒」と「酒」。

「お酒」と言えば、透明のグラスに注がれたフルーティーな香りのカクテルが頭に浮かぶ。しかし「酒」と言えば一升瓶から注がれる芋臭い焼酎みたいなイメージである。十時間にも及ぶ研修も終盤に差し掛かり、検定の時間になった。

「じゃあ飲みものを勧めてみてください」
とつさに僕はこう答えた。

「何か飲みものをお飲みになられますか」

「お・の・み・も・の！」

会場は一気に笑いに包まれ、僕は思わず下を向いた。あの時の恥ずかしさは今でも昨日のこのように覚えている。

そんな口下手な僕も入社十年目を迎え指導職に。そうは言っても口下手が完全に直ったわけではない。相変わらずプレゼンではお腹が痛くなり、終わったあとは変な汗をかいている。

今年僕の部署に二十歳の新入社員が入って来た。一ヶ月の研修を経て、いよいよ一人立ちのとき。しかし彼はフロアに出ても何度も僕のところをやって来た。

「先輩、お箸はどこにありますか」

「先輩、コップが割れました」

その他にもゴキブリがいたのだの、トイレが詰まっているのだの。それは正直僕に聞くようなことではなかった。

(ああ、また来た……)

彼が来るたび心の声が漏れそうになるのを抑えた。

「ああ、そうなの」

そう言っただけ僕には重い腰をあげた。確かに自己判断で勝手に動かれるよりはいい。彼は適当でなく慎重なんだ。今は自立のための第一歩。部下がこうしてつまらないことまで聞いてくるのはむしろ僕が受け入れるべき壁なのかもしれない。そう思うことにした。

しかしそんな悠長なことを言っただけで出来ない出来事が起きた。僕のぎっくり腰の発症だ。床に落ちた伝票を拾おうとした時のことだった。腰が砕けるかと思う程の痛みに悶絶した。それこそ会社に行くのも一苦勞だった。しばらくはデスクワークしかできない。僕も周りもそう思っていた。そんなことは僕の歩く姿を見れば一目瞭然だった。

しかし彼は違った。

「先輩、あの、ちよつと外国のお客さんなんで来てもらえますか」

「先輩、フロア番が足りないんですけど来てもらえませんかねえ」

顔で笑って心で泣いた僕も、二回目はさすがに堪忍袋の緒が切れた。

「ああ、もういい加減にしろー！」

途端に場が凍りついた。それ以上に固まったのは部下だった。小さく「すみません」と言つてその場をあとにした。その去り行く背中が寂しそつだった。

(ああ、言い過ぎてしまった)

僕はその背中に詫びるしかなかつた。

部下への苛立ち。いや、むしろ自分に対する嫌悪感でいっぱいになった。僕はその憂鬱を抱えたまま帰宅の途についた。

「なにその顔」

僕の表情を真つ先に読み取つたのは妻だつた。僕は事の一部始終を話した。妻は呆れた顔で聞いていた。それから言い放つた。

「あなたは『ああ』つて言い過ぎなのよー 『AH』じゃなくて『OH』よ」

なんとも流暢な英語。発音の良さはさすが帰国子女である。

「つまりね『ああ』また来たの『じゃなくて』おお、よく来たね『つて言つてみるのよ』」

なるほど。確かに「おう、よく来たね」と言われればお互いに嫌な気はしない。僕は妙に納得してしまつた。

「だから『あ、マズイ』つて言つより『おっ』つて言つてみるの。『おっ、いいね』つて言いたくなるでしょ」

目から鱗だつた。「おっ」や「おお」に続くプラスの言葉。そこから生まれるプラスの感情。僕は大きく頷き、妻はボンと肩を叩いた。

「これで明日から『お』をつけてね」

(んっ、『お』をつけるっ)

ふと僕は昔の研修を思い出した。あの時、講師の先生は言つた。「お」をつけると言葉が美しくなると。これは偶然の一致か。それとも必然か。だけどそんなことはどうでもいい。

「お」をつける心。それは相手を重んじる心であり、思いやる気持ち。つまり相手に対するおもてなしの心。ならば大いに使おうじゃないか。こんな僕でも。いや、こんな僕だからこそ。

あれから半年、あの部下は相変わらず僕に聞いてばかりいる。しかし「ああ、またか」と思つている限り相手にもそれが伝わり、心の通つたコミュニケーションはとれないとわかつた。前向きな言葉からは前向きな会話が生まれる。美しい言葉からは美しい気持ちが生まれる。それが「お」の魔法。

今日も昼食時、部下が「今日はデートなんです」と言つてきた。もちろん「ああ、そうなの？」とは言わない。僕はこう言つた。

「おお、そうなんだ」